

公害の原点といわれる水俣病が南九州の片隅で発見されたのは、経済白書が「もはや戦後ではない」と謳^{うた}った1956年のことでした。以後、被害者の運動やさまざまな裁判、調査、研究によって水俣病事件は少しずつ明らかにされてきました。それは、直接の被害者でも加害者でもない私たちにとって、この社会を考える上で、たいへん示唆に富むものでした。

加害企業チッソの技術力は、世界の化学工業界の中でもトップクラスにありました。その生産過程で副生された原因物質のメチル水銀は、自然界にはまず存在しないものであり、わずか耳かき半分ほどで人を死に至らしめる猛毒でした。水俣湾をつつむ不知火海は、沿岸漁民の主食ともいべき魚介類の宝庫でしたが、ここに注ぎ込まれたその総量が一億国民を二回殺してもなお余りあるほどに至るまで、チッソの生産活動はつづけられました。

原因をそれと知りながら隠蔽しつづけたのはひとりチッソに限りません。近代民主国家を標榜するわが国行政は、同じ工程をもつ他企業への問題の波及、化学工業界への打撃、ひいては工業化政策全体の遅延を恐れて加害企業を庇護しました。新潟水俣病の発生は、いわば必然だったのです。その一方で、排水停止と謝罪を求める被害民に対しては、警察力をもって応えたのでした。困窮の極みにあった被害民に対して、市民もまた白眼をもって接し、革新勢力や宗教家さえ救いの手をさしのべようとはしなかったのです。

その後も行政は、患者補償金支払いの継続確保という名目でチッソへの格別の融資を続行する一方、医学界の権威を動員して病像を狭く限定することによって、万を数える被害民の苦痛を否定しつづけてきました。

地球環境保全が声高に叫ばれるに至ってようやく成立した未認定患者の救済策をみても、この構造に本質的な変化があったとはいえません。これらの事実から、企業、国家、科学、ひいては現代社会全般のありようを再検討しなければならないことに気がきます。

しかし、水俣病の発生原因それ自体であるチッソの生産活動およびこれに類する経済活動、技術開発によって、現在の化学工業の成長と日本の経済的発展、「便利で豊かな生活」がもたらされたのは否定しようもない事実です。そしてそれはこの国だけのことではありません。世界中が、数えきれないほどの“水俣病”を生みだしながら近代工業化、産業の高度化を競っています。こと水俣病から目を転じて、この「近代科学技術による工業生産を基盤とした民主主義国家システム」がもたらす多くの矛盾や危機の具体例は、枚挙にいとまがありません。しかし、それを乗り越えるための具体的な方法については、誰ひとり解答をもっていないという状況の下、社会の病状は静かに進行しています。最大多数の最大幸福の追求が、少数者への苛烈な抑圧を生み出すのみならず、結果として多くの現代人の内に、人としての存在の希薄化と関係性の腐食をもたらし始めています。

21世紀、日本。いま私たちは、このような時代の中で生きているのです。

思いおこせば、壮絶な病苦と疎外、それゆえの貧困の極みにありながら、果敢に声を上げていった方々のやさしさと巨^{おお}きさによって、私たちは支えられ援^{たす}けられてきたのではなかったでしょうか。そうした方々の言葉にあらためて耳を傾け水俣病を問い直すことは、私たちがこれから先、どのように生きていくかを考える上で少なからぬ果実をもたらしことでしょう。水俣病に関するすべての表現、研究、記録をひもとき、状況に照らしてこれらを再構築し、今を生きるすべての人に伝えたいのです。

水俣病発生の公式確認より半世紀をへて「水俣展」というべきものの開催です。この会場によみがえる水俣の言葉や表情、風景の一片でもご記憶の片隅にお加えいただければ幸いです。

団体名 認定NPO法人 水俣フォーラム
代表者 理事長 実川 悠太
所在地 東京都新宿区高田馬場1丁目34番地12号
 竹内ローリエビル404号室
設立日 1997年10月11日

設立経過
 1992年5月 水俣・東京展実行委員会発足準備会、活動開始
 1994年5月 水俣・東京展実行委員会、発足
 1996年9月 「水俣・東京展」16日間開催 (30,083人)
 1997年10月 同実行委員会をともに、水俣フォーラム設立
 2001年4月 特定非営利活動法人として登記
 2007年5月 税制上の優遇措置を公認された認定NPO法人となる

会員 2015年6月19日現在
 一般会員822人 (年会費1人 6,000円)
 賛助会員 35人 (年会費1人50,000円) 計857人

設立目的
 全国各地での「水俣展」の開催をはじめとするさまざまな事業活動を通じて、水俣病事件を深く知り広く知らせ、これによって「近代」や「人間」について、ともに考える機会を多くの人々に提供する。

年間予算
 2010年度決算 収入4,326万円 支出3,517万円
 2011年度決算 収入2,577万円 支出2,832万円
 2012年度決算 収入2,440万円 支出2,496万円
 2013年度決算 収入3,345万円 支出3,694万円
 2014年度決算 収入3,417万円 支出3,120万円
 2015年度決算 収入2,035万円 支出2,933万円
 2016年度決算 収入3,874万円 支出3,622万円
 2017年度予算 収入5,432万円 支出5,392万円

受賞
 朝日新聞社主催「第5回明日への環境賞」2004年
 浄土宗主催「第3回共生・地域文化大賞 共生奨励賞」2009年

理事 ※理事は運営委員を兼務
東郷佳朗 神奈川大学准教授、法社会学
関口 清 川崎市職員
秋元孝行 江戸川区職員
郡山リエ 元・福祉施設職員
笹本裕子 都立忍岡高校教員
実川悠太 常勤
服部直明 事務局長、常勤

監事
青山俊介 環境構想研究所代表取締役、環境コンサルタント
若林昭子 公認会計士

評議員
青山俊介 環境構想研究所代表取締役、環境コンサルタント
北川フラム アート・ディレクター、アートフロント・ギャラリー代表
栗原 彬 立教大学名誉教授、政治社会学
土屋忠一郎 明治大学教授、哲学者
富樫貞夫 熊本大学名誉教授、水俣病研究会代表、民事訴訟法
畠山武道 北海道大学名誉教授、北海道自然保護協会理事、行政法
見田宗介 東京大学名誉教授、社会学
柳田耕一 環境アドバイザー、元・水俣病センター相思社世話人

専門委員
制作担当 市川敏明 アート・ディレクター
展示担当 鈴木紀雄 埼玉県立浦和西高校教員
資料担当 吉永利夫 水俣病を語り継ぐ会理事
映像担当 丸岡秀樹 映像作家、川口SKIPシティ指導員

運営委員
渡辺純規 都立城東高校教員
木村友祐 作家
内田義久 食品・薬品会社員
若松孝子 主婦
中野正人 精神保健福祉士
三浦隆征 一般社団法人職員
吉家あかね 国立国会図書館職員
貞重太郎 地質調査員
川尻剛士 埼玉大学大学院生
中村祐希 女子栄養大学生
大八木勉 事務局、非常勤、日本映画大学職員
和田鈴子 事務局、非常勤
木村奈緒 事務局、非常勤

赤木洋勝 元・国立水俣病総合研究センター疫学部長
秋葉忠利 元・広島市長、広島大学特任教授
秋吉敏子 ジャズピアニスト
芥川 仁 写真家
池澤夏樹 作家
石牟礼道子 作家
磯崎 新 建築家
伊藤比呂美 詩人
色川大吉 東京経済大学名誉教授、歴史学
上田紀行 東京工業大学教授、文化人類学
上野千鶴子 元・東京大学教授、家族社会学
内橋克人 経済評論家
大石芳野 写真家
大沢菜穂子 無農薬みかん生産からたち事務局
大田 堯 元・日本教育学会会長、教育哲学
緒方正人 漁師、水俣病患者、水俣・本願の会
岡本達明 元・新日窒労働組合委員長、民衆史
おすぎ 映画評論家
小田和正 ミュージシャン
加藤三郎 環境文明研究所所長、元・環境庁地球環境部長
加藤たけ子 共同作業所水俣ほっとはうす施設長
加藤典洋 早稲田大学教授、文芸評論家
金子 勝 慶應義塾大学教授、経済学
上條恒彦 歌手、俳優
川那部浩哉 元・滋賀県立琵琶湖博物館館長
川本愛一郎 水俣病患者、故・川本輝夫遺族、作業療法士
姜 尚中 東京大学名誉教授、政治学
甲野善紀 武術家
小宮悦子 キャスター
小室 等 ミュージシャン
是枝裕和 映画監督
崔 洋一 映画監督
坂口恭平 作家、建築家
坂本しのぶ 胎児性水俣病患者
佐高 信 経済評論家
澤地久枝 作家
潮谷義子 前・熊本県知事、日本社会事業大学理事長
C.W.ニコル 作家
杉本肇 水俣病患者家族、故・杉本栄子遺族、漁師、やうちプラザーズ代表
高橋源一郎 作家
高橋 昇 ガイアみなまた
高峰 武 熊本日日新聞論説主幹
田口ランディ 作家

竹下景子 女優
田中優子 法政大学学長、近世文化
坪倉善彦 NHKアナウンサー
長倉洋海 写真家
中島岳志 東京工業大学教授、政治学
永野三智 一般財団法人水俣病センター相思社常務理事
中村桂子 JT生命誌研究館館長
仲村昭一 元・部落解放同盟大阪府連合会北条支部長、水俣病患者
野中ともよ ジャーナリスト、元・三洋電機代表取締役会長兼CEO
萩尾望都 漫画家
浜四津敏子 元・環境庁長官
平田オリザ 劇作家
日吉フミコ 水俣病市民会議会長、元・水俣市議会議員
ピーコ ファッションジャーナリスト
ピーター・バラカン プロードキャスター
本多勝一 ジャーナリスト
松崎忠男 水俣病患者、チッソ水俣病患者連盟委員長
見田宗介 東京大学名誉教授、社会学
水戸岡鋭治 ドーンデザイン研究所代表、JR九州デザイン顧問
宮本憲一 元・滋賀県立大学学長、日本環境会議代表
森 達也 ドキュメンタリー作家
森岡正博 早稲田大学教授、倫理学
柳田邦男 ノンフィクション作家
山上徹二郎 株式会社シグロ代表、映画プロデューサー
山口紀洋 僧侶、弁護士、水俣病関係訴訟弁護士
山田太一 脚本家
山田 真 小児科医師、八王子中央診療所長
吉井正澄 元・水俣市長、元・自由民主党水俣支部長
吉永理巴子 リグラス工房主宰、水俣病患者
吉本哲郎 元・水俣市立水俣病資料館館長、地元学ネットワーク主宰
米本昌平 東京大学先端科学技術研究センター特任教授、科学史
若松英輔 批評家、シナジーカンパニージャパン代表取締役
渡辺京二 評論家、歴史家

※2017年6月8日現在

水俣展

水俣病を伝えるために全国各地で開催。24展合計入場者13万7,427人。

東京展：東京都（品川駅前開発用地）

96年9月28日～16日間、30,083人

豊橋展：愛知県（豊橋市民文化会館）

98年8月26日～5日間、3,800人

つくば展：茨城県（茨城県立つくば美術館）

98年12月9日～11日間、1,791人

高島展：山形県（高島町糠野目生涯学習センター）

99年6月24日～4日間、1,566人

おおさか展：大阪府（ATCミュージアム）

99年9月4日～16日間、6,829人

沖縄展：沖縄県（沖縄コンベンションセンター）

99年9月26日～7日間、13,081人

浜松展：静岡県（アクトシティ浜松）

99年10月9日～9日間、6,317人

東京展2000：東京都（東京都写真美術館）

00年7月20日～16日間、6,279人

川口展：埼玉県（川口総合文化センター・リリア）

01年3月17日～9日間、1,759人

佐伯展：岡山県（佐伯町学び館・サエスタ）

01年5月5日～9日間、5,036人

水俣病展：熊本県（水俣市立総合体育館）

01年10月12日～10日間、4,387人

金沢展：石川県（金沢勤労者プラザ）

01年11月17日～7日間、1,076人

広島展：広島県（アステールプラザ）

02年7月2日～6日間、1,840人

名古屋展：愛知県（名古屋市科学館）

02年11月16日～45日間、8,064人

川崎展：神奈川県（アートガーデンかわさき）

04年1月6日～30日間、9,298人

札幌展：北海道（北海道大学学術交流会館）

04年5月30日～16日間、9,346人

貝塚展：大阪府（貝塚市民文化会館）

06年1月13日～10日間、3,568人

和光大学展：東京都（和光大学体育館）

06年9月15日～10日間、2,417人

新潟展：新潟県（新潟市美術館）

08年8月2日～20日間、3,202人

千葉展：千葉県（千葉県勤労者福祉センター）

08年12月10日～19日間、2,339人

明治大学展：東京都（明治大学駿河台キャンパス）

10年9月4日～16日間、6,483人

白河展：福島県（マイタウン白河）

11年11月11日～10日間、1,725人

福岡展：福岡県（JR九州ホール）

13年5月15日～13日間、4,771人

岐阜展：岐阜県（岐阜市民会館）

14年11月22日～9日間、2,367人

水俣病記念講演会

水俣病発生の公式確認の日、5月1日前後に毎年開催。99年開始、15回合計入場者10,713人。

40年記念「水俣の事実は現代日本に何を語るのか」

1996年4月29日、有楽町朝日ホール、1,300人

講師：胎児性水俣病患者5人、石牟礼道子、原田正純、日高六郎 司会：澤地久枝

第1回「私たちは何を失ったのか、どこへ行くのか」

1999年4月29日、有楽町朝日ホール、785人

講師：荒木洋子（患者）、石牟礼道子、網野善彦、筑紫哲也 司会：大石芳野

第2回「水俣病と現代社会の加害と被害を考える」

2000年4月29日、有楽町朝日ホール、538人

講師：緒方正人（患者）、原田正純、柳田邦男 司会：本間千枝子

第3回「この日本に生まれて」

2001年4月21日、有楽町朝日ホール、466人

講師：杉本栄子（患者）、宇井純、大岡信、鶴見俊輔 司会：蓮舂

第4回「自然からの剥離の中で」

2002年4月27日、有楽町朝日ホール、665人

講師：川本ミヤ子（患者）、石牟礼道子、C.W.ニコル、森岡正博 司会：長倉洋海

第5回「分断と交感を生むもの」

2003年4月20日、有楽町朝日ホール、475人

講師：仲村妙子（患者）、色川大吉、萩尾望都 司会：上條恒彦

第6回「改めて原点から考える」

2004年4月25日、有楽町朝日ホール、484人

講師：大矢理巳子（患者家族）、原田正純、岡本達明 朗読・司会：竹下景子

第7回「社会という幻影」

2005年5月1日、中日新聞大ホール（名古屋）、249人

講師：原武千潮（患者）、富樫貞夫、崔洋一、阿部謹也 朗読・司会：田口ランディ

50年記念「新たな50年のために」

2006年4月29日、日比谷公会堂、1,621人

講師：水俣病患者・家族10人、原田正純、柳田邦男、田口ランディ 司会：平田オリザ

第8回「生命へのまなごしを問われて」

2007年5月19日、道新ホール（札幌）、754人

講師：杉本栄子（患者）、原田正純、鎌田慧、長倉洋海 司会：下村健一

第9回「目を開き、耳をすまして」

2008年4月29日、有楽町朝日ホール、668人

講師：生駒秀夫（患者）、富樫貞夫、井上ひさし、大石芳野 司会：ピーター・バラカン

第10回「崩壊と蘇生の間で」

2009年4月29日、北九州国際会議場、224人

講師：諫山茂（患者）、栗原彬、磯崎新、澤地久枝 司会：三砂ちづる

第11回「逆照射される私たち」

2010年4月24日、有楽町朝日ホール、665人

講師：緒方正実（患者）、吉井正澄、池澤夏樹、内橋克人 司会：落合恵子

第12回「人間存在の極限に」

2012年5月6日、有楽町朝日ホール、702人

講師：杉本雄（患者）、高橋源一郎、田中優子 司会：斎藤季夫

第13回「花を奉る」

2013年4月21日、JR九州ホール、814人

講師：緒方正人（患者）、石牟礼道子、柳田邦男、池澤夏樹 司会：上條恒彦

第14回「ともに生きていく」

2014年5月6日、有楽町朝日ホール、831人

講師：杉本肇（患者家族）、丸山定巳、上野千鶴子、中島岳志

ライブ：やうちブラザーズ 司会：大倉正之助

第15回「いま、人として」

2015年5月9日、有楽町朝日ホール、772人

講師：川本愛一郎（患者家族）、岡本達明、上田紀行、平田オリザ 司会：小宮悦子

60年記念特別講演会

2016年5月3・4・5日、東京大学安田講堂、2364人

講師：杉本肇（患者家族）、吉永理巳子（患者）、緒方正人（患者）、除本理史、柳田邦男、森達也、鶴田和仁、中村桂子、若松英輔、成元哲、加藤典洋、奥田愛基 司会：小宮悦子、荻上チキ、高橋長英

水俣セミナー

都内を会場に多彩な講師をお呼びして不定期開催。98年1月開始、111回合計入場者5,070人。

水俣病読書会

水俣病の基礎文献を20～30人の参加者が2～3ヶ月かけて読む。08年開始、7回合計参加者125人。

08年：石牟礼道子『苦海浄土』

09年：原田正純『水俣病』

10年：栗原彬編『証言 水俣病』

11年：石牟礼道子『苦海浄土 第二部 神々の村』

14年：後藤孝典『沈黙と爆発 ドキュメント水俣病事件』

15年：石牟礼道子『苦海浄土 第三部 天の魚』

16年：石牟礼道子『苦海浄土』

水俣への旅

初めて訪れる方を対象に3泊4日で毎年催行。98年開始、15回合計参加者307人。

水俣病大学

水俣病事件に関する全領域を網羅する30講義で、「水俣病の学びを導く人」を養成する。12年開始、隔年開催で資格授与11人、卒業17人、聴講186人。

その他の催し

カナダ水俣病講演会

2011年9月17日、YMCAアジア青少年センター、281人

講師：原田正純、カナダ水俣病被害者

水俣病に関する研究会などの開催

水俣病関連企画への助言・相談受付・講師派遣
水俣病に関連する書籍・映像の企画・編集・製作
『水俣病ビデオQ&A』1996年（企画・製作協力）
『水俣展総合パンフレット』1999年（編集・発行）
『証言 水俣病』2000年、岩波新書（企画・共編）
『僕が写した愛しい水俣』塩田武史、2008年、岩波書店（企画・共編）

「水俣病ライブラリー」の運営

書籍・ビデオ・CD

機関誌の発行（97年創刊、05年リニューアル、A5判44ページ以上、既刊37号）

ホームページによる情報の受発信